

朝 礼 拜 順 序 (午 前 10 時 半)

前	奏	+ 5分前着席黙祷	
開 会 招 詞			司式 熊田雄二 牧師
* 贊 美 歌		13 : 1 万のものとわに(讃美歌 67)	奏楽 大日南苗香姉妹
* 開 会 祈 禱			
罪 の 告 白		祈禱書 2	
罪の赦しの宣言			
十 戒		祈禱書 4	
* 贊 美 歌		52 : 1 たくみのわざをば(讃美歌 367)	
公 同 の 祈 禱		祈禱書 19 聖霊降臨節第二主日 三位一体	
献 金		(黒)教会活動 (赤)海外医療協力会	70
<u>毎週の礼拝献金については、会堂での礼拝再開時に、まとめてお捧げください。</u>			
毎月の教会献金(月定)についても、会堂での礼拝再開時に、まとめてお捧げください。			
聖 書 朗 読		ヨハネの手紙一 1章(新約441頁)	
説 教・祈 禱		礼拝は生命④「罪の告白と赦しの宣言」	熊田牧師
* 贊 美 歌		47 : 1 主よ我をば(讃美歌 333)	
* 主 の 祈 り		祈禱書 1	
* 頌 栄		65 父・御子・御霊の(讃美歌 541)	
* 祝 禱			
後 奏			
報 告			長老

○ 本日 ● 10:00 小会祈禱会 ネット

● 午後1時 小会・執事会 コイノニアホール&ネット

「礼拝指針」 第六章 罪の告白と罪の赦しの宣言

第十八条 (罪の自覚)

礼拝する者は、アダム以来の罪と神に対する反逆を自覚し、罪の意識を明確にし、人々の罪深さを嘆き、自らの罪を悔い、悲しみ、赦しを求める。

第十九条 (罪の告白と赦しの宣言)

司式者は、礼拝者に罪の告白をするよう促がし、赦しの確かさを伝える職務を自覚し、ふさわしい定式を使用し、彼らが聖霊に導かれるように、適切な表現で罪の赦しを宣言する。

- 次週朝拝 ヨハネによる福音書6章48-59節、マタイによる福音書26章26-28節
「イエス様の血、私たちの命」 スパーリンク宣教師
賛美歌:SS25番(讃美歌162)、SS49番(讃美歌352)、
讃美歌259番1-3節、SS65番(讃美歌541) 森永美保姉妹

【説教の趣旨】

教会でミサとか聖餐式がある時に、「キリストの血」という表現を聞きます。キリストの血に、私たちを罪のけがれから清める力があるとされます。好奇心が生じるかもしれませんが、同時に、血を飲むこと、血を注いで洗ってもらいなさいと言われると、抵抗を感じるでしょう。では、聖書はこれをめぐってどう教えているかを確認したいと思います。

- ＊ 次週、「埼玉西部地区伝道のつどい」は中止です。

《開祭》

入祭の歌：招きの言葉と開会賛美歌

あいさつ：開会祈祷

回 心：罪の告白（ミゼレトゥール）

あわれみの賛美歌（キリエ）

栄光の賛美歌（グロリア）

集会祈願（公同の祈祷）

《ことばの典礼》

聖書朗読 1

答唱詩篇：詩篇歌

聖書朗読 2

ハレルヤ唱

福音書朗読

説 教

信仰の宣言（使徒信条、ニケア信条）

共同祈願：公同の祈祷

《感謝の典礼》 供え物の準備

奉納の歌と奉納行列

パンを供える祈り

ぶどう酒の準備

カ リ ス（大地の恵み、労働の実り）を供える祈り

清 め（司祭が手を洗う）

奉納祈願

感謝の賛美歌（サンクトゥス）

奉 献 文（聖餐制定の言葉）

記 念 唱（瞑想、アナムネーシス）

栄 唱（頌栄）

《交わりの儀》

主の祈り

平和の挨拶

平和の賛美歌（アニュス・デイ：神の子羊）

拝領前の信仰告白

拝 領

拝領後の感謝

拝領祈願

《閉祭》

お知らせ（報告）

派遣の祝福（祝禱）

閉祭の挨拶

退 堂

I 「礼拝指針」より礼拝の要素一つ一つを学ぶ

きょうは4回目、罪の告白と赦しの宣言です。

前回の賛美歌では、キリストの言葉に満たされてキリストに似た者となるとキリストの香りを放つようになることを学びました。賛美しながら「いつも喜んでいて、絶えず祈っている。全てのことに感謝している。」これができたら、キリストの香りを放ちながら微笑んでいることができます。モナリザもビックリです！

しかし、今朝の学びでは、招きの言葉 → 罪の告白 → 赦しの宣言という流れが、賛美を正しく導いてくれることを味わいましょう。そうすると、暗いこわばった顔から明るい顔へと変化するので、賛美は心の深いところから癒しと力を与えることを知ることになります。

II 罪の告白と赦しの宣言を導く第一ヨハネ1章

- ① 礼拝は神と私たちのまじわりですが、まず神の中に神秘的なまじわりがあります。父と子と聖霊の三位一体の神の愛のまじわりです。その中に私たちは招かれたのです。この私たちと神とのまじわりが礼拝です。神の愛のまじわりの中へと招きがあるから、罪の告白ができるのです。罪に怒って裁こうと待ち構えておられたら、告白するどころか近づくことさえできません。1~4節。
- ② 次の段落5~10節は、罪の赦しで最も慰めに満ちた言葉です。特に9節。これはヨハネという人の人間的教えではなく、主イエスの教えに基づくものです →5節。イエスをキリストと信じて罪を告白する者への赦しの宣言です。人からではなく神からの赦しですから、確実な赦しです。
- ③ イエスをキリストと信じて罪を告白することは、神とのまじわりを持って光の中を歩み始めたということです。もう罪を犯さない清い人になったということではありません。神の光に照らされたら、自分の心の闇が明らかにされます。地上にあるかぎり清さは未完成だからです。8~10節。

④ 神の御心は清くなることです。だから、御子イエスの血をいただかなくては汚れた身と魂のままです。礼拝で繰り返し罪の告白をするのは、この世にいるかぎり罪を犯してしまうので、繰り返しキリストのもとに来るよう招かれているからです。神とのまじわりを持つと言う者は、礼拝に来ます。自分の罪を闇に葬り去ろうとはしません。罪の告白をするたびにキリストをいただくのですから、神の光に照らされることを喜びます。だから、6・7節。清くなろうと思っても、完全聖化は地上では成し得ません。繰り返しキリストのもとに来なさいと、招かれているのです。

Ⅲ 「礼拝指針」第六章 罪の告白と罪の赦しの宣言

① 第十八条（罪の自覚）

礼拝する者は、アダム以来の罪と神に対する反逆を自覚し、罪の意識を明確にし、人々の罪深さを嘆き、自らの罪を悔い、悲しみ、赦しを求める。

アダム以来の罪とは神に対する反逆ですが、悪魔の誘惑の言葉を吟味する必要があります。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを、神はご存じなのだ。」(創世記3章) つまり、アダムは、「神のようになる」という誘いの言葉に乗ってしまいました。「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない」という神の命令は、決して神の領域を侵してはならないという意味でした。人は神のかたちに似せて造られたが神ではない、これをわきまえよ、というのが、禁断の木の実の指針でした。

礼拝に関してアダム以来の罪を自覚するとは、神になろうとした人間は、自分の栄光を表わして自分が賛美されたがる存在になっていることを深く知ることです。この高慢な心は、天からへりくだって来られた救い主によってのみ

砕かれます。人が神になろうとして逆らう魂は、神が人になってくださった愛と恵みによってのみ砕かれます。救われて砕かれた魂は、罪を悔い、悲しみ、赦しを求めて、神を賛美し礼拝する者となります。

② 第十九条（罪の告白と赦しの宣言）

司式者は、礼拝者に罪の告白をするよう促がし、赦しの確かさを伝える職務を自覚し、ふさわしい定式を使用し、彼らが聖霊に導かれるように、適切な表現で罪の赦しを宣言する。

罪の告白には、詩篇 51 編と 32 編がよく用いられます。特に 51 編は、カトリック（ローマ・カトリック）の礼拝で「ミゼレーレ」という賛美で唱えられてきました。「ミゼレーレ」は 51 編の始め「神よ、私を憐れんでください」の「憐れんでください」です（ラテン語）。

この伝統を受け継いでいるプロテスタントは、ダビデの罪を自分の罪として告白することになります。羊飼いの少年だったのに、王になると、神の戒めに反して絶対的権能を欲しいままにしたダビデは、確かに「母が私を身ごもったとき」からアダムの子を受け継いでいました。

罪の赦しの宣言をするのは、人間ではなく神ですから、告白（告解）を聴いた司祭や神父ではありません。牧師でも長老でもありません。司式者は、三位一体の神の名において罪の赦しを宣言します。上福岡教会では聖書から罪の赦しを四種類用意しています。そして、赦された喜びをもって十戒を唱えたあと歌う賛美歌と連動させています。そこで、週ごとの礼拝で罪の負債を清算し、神の戒めに生きる決意をします。生涯、キリストの十字架と復活により、癒しと力を受けます。

Ⅳ ミサの改革と改革派教会の礼拝式次第

① カトリックにおける懺悔は、懺悔室で行なう個人のもとの共同礼拝の「ミゼレーレ」とあるのですが、精神としては両方大事です。毎週ミサに行く人もいれば、ほとんど行かない信者もいます。年1回は聖体を拝領しなければならぬのですが、大罪を犯した場合は、聖体拝領の前に罪の赦しの儀式(礼典)を受けなければならないことになっています。

懺悔室で司祭に罪の告白をする。司祭は罪の大小によって償いを命じる。償いが済んだら聖体拝領(聖餐式)にあずかれる、という具合です。

しかし、罪を十分償ったかどうかは、本人にも司祭にも分かりません。大罪とは、重大な事柄ではっきり悪いと分かって犯した罪。小罪とは、小さな罪または重大でもはっきり意識せず犯した罪。また小さな罪でも積み重ねたら大罪になる、という具合です。結局、大罪と小罪の区別は不明瞭なのです。

私たちは、聖書から主イエスの聖餐式制定の言葉をしっかり心に留めるだけで十分です。

「これは、罪の赦しを得させるように、多くの人のために流す、私の血によって立てられた新しい契約である」。これを、神の契約の言葉として覚えて行なえと命じられました。

② プロテスタントは、ミサのプログラムを基本的には受け継ぎました。週報裏面の「ミサの式次第」を見ていただくと、それが分かります。いくつかの要素は、今朝の私たちの式次第にもあります。その中で、「罪の告白」を受け継いだのが特に改革派教会です。長老教会はピューリタン時代にそれを省いていましたが、20世紀の礼拝改革では取り戻すようになってい

ます。カルヴァンたち改革者は、懺悔を七つの礼典から外しましたが、懺悔自体は重んじたのです(七つの礼典=洗礼・聖餐・堅信:聖霊のバプテスマに近い・叙階・結婚・病者への塗油・ゆるし:懺悔)。カトリックの懺悔は、告白と償いからなっていますが、改革者は告白の部分は残したのです。償いは、ただキリストの十字架によります。だから司祭を通してではなく、キリストを通してのみ神に近づき罪を告白するのです。牧師は、礼拝の司式者であると同時に罪の告白をする者の一人です。また、罪の赦しに関して何の権威も権限も持っていません。ただ、神の赦しを宣言する器です。

③ 礼拝が待ち遠しい理由の一つは、罪の告白をすることができることです。洗礼後に犯した罪は自分で償えという教えだったら、礼拝は待ち遠しくありません。「仕方がない、罪を告白するか」と年に一度、重い腰を上げて懺悔室に行くほかないでしょう。

私たちは、この世に生かされている限り、罪を犯さない日は一日もありません。しかし、キリストを罪からの救い主として受け入れるなら、神は私たちに赦し、神の子として受け入れてくださいます。こんな罪深い私にキリストを与えてふところに抱こうと、毎週招いてくださるのです。

④ 毎週、毎週、神は両手を広げて、待っていてくださいます。キリストにおいて罪を赦そうと招いてくださいます。神はその独り子をお与えになったほどに私たちに愛してくださいました。キリストの十字架は、完全な罪の償いです。キリストの復活は、完全な罪への勝利です。神からの赦しの宣言は確実で、赦された罪人は感謝の思いに満たされます。それが、繰り返し十戒を唱えて神の戒めに生きる決意へと向かわせる力になります。